

Title	大学のグローバル化における図書館の役割 -留学生サービスから考える- <平成25年度 京都大学図書館機構講演会>(講演会概要記録)
Author(s)	森, 眞理子; 河上, 志貴子; 横山, 美佳; ヌ, キョンラン
Citation	(2013)
Issue Date	2013-12-11
URL	http://hdl.handle.net/2433/180546
Right	
Type	Presentation
Textversion	author

平成 25 年度京都大学図書館機構講演会記録

平成 26 年 11 月 18 日

京都大学図書館機構

図書館業務改善検討委員会 能力開発・研修部会

基調講演

「大学のグローバル化をめぐる昨今の変化と現状の課題 —留学生の図書館活用の現状と将来展望—」

京都大学国際交流センター長

森真理子教授

同センター

河上志貴子准教授

1. 京都大学のグローバル化の現状

本日は京都大学のグローバル化の現状について、学生の学習、研究、キャンパスライフをとおしてお話したい。

本学の留学生の受入はこの5年で大きな変化が起こっている。政府による「アジア人材資金構想」（京大では工学研究科修士課程に英語のみで受験する留学生を受入れ、日本での就職を目指して日本語やビジネス文化を教える）、「グローバル 30」（2014 年 3 月で終了。英語コースの確立、英語での単位取得、留学生への日本語教育）、「大学の世界展開力強化事業」（双方の学位を取得・日本再発見）等により、留学生受け入れの増加と質的な変化が起こっている。また、留学生の受入とあわせて、日本人学生の海外留学についてもグローバル人材育成の観点から、学部生のうちからどんどん海外に留学させる動きが活発化している。

世界の留学生受入の推移を見ると、米国が突出して多く、英国も多い。日本は少ないが 10 万人計画を達成しており、現在も増加している。

本学の留学生受入数は 2013 年 5 月 1 日現在

で 1,733 名である。この内訳だが、本学は大学院大学ということもあり、博士後期課程学生が最も多い。修士課程学生も多いが、学部学生は少ないのが特徴である。これらの正規学生が全体の約 80%を占めており、その他は研究生や交換留学生等である。この交換留学生等をもっと戦略的に増やしたいと考えている。

2. 日本語・日本文化教育

国際交流センターでは、每期 400 名以上の留学生が日本語講義を受講している。先ほどの受入留学生数の分布とは異なり、修士課程学生と研究生の受講が多い。これは、修士課程学生は日本で就職を考えており、実用的な日本語を学ぼうとしているからだと考えられる。また、研究生は日本の大学院入試に受かるため、交換留学生は単位取得のために受講しているようだ。博士課程学生や研究者については、研究自体は日本語でなくてもできるが日本で生活するために必要なので受講する、という人や、専門が日本文化なのでレベルの高い日本語を学ぶ人など、日本語を学ぶ目的は多様である。

日本語講義は 6 段階のレベルを設定している。ビジネス日本語コースは、日本で就職を希望する修士課程学生が受講している。桂キャンパスでも開講しており、多くの学生が受講できるようにしている。また、キャンパス間を結んだ遠隔日本語講座も設けている。語学学習の初級レベルの講義は対面式で行うのが有効であるため、遠隔日本語講座は中級クラス以降を想定している。他にも、対面講義の補完用の自主学習ツールとして日本語 e-ラーニング「さみどり」を導入してお

り、入学前にこれで学習してもらうことも検討している。

3. 京都大学の学生派遣

次に本学からの学生派遣だが、派遣制度は1年以上の長期留学制度や、学生交流協定の協定校に学生を送る交換留学制度(1年または6ヶ月の中・長期)、春・夏休暇に語学研修を主とした短期留学プログラム(2週間から1カ月程度)、日本再発見 SEND プログラム(2~3週間、日本人学生が外国で外国語を使って日本を説明するプログラム)等がある。

学生交流協定校は2013年12月現在で69校あり、半年後には2倍を目指そうとしている。協定先はアジア・欧州が多く、北米は比較的少ない。したがって、交換留学による学生派遣のここ6年間の推移をみると、アジア・欧州が多い。5年ほど前は年間約30名の学生派遣であったが、2012年は約80名に増えている。しかし、同年の交換留学による受入数は127名であり、まだ派遣と受入のバランスが取れていない。こちらからもっと送り出す必要がある。

短期派遣プログラムについては、派遣先は東南アジア・中国・欧州が多く、120名程度を派遣している。語学研修やフィールドワーク、インターンシップなど多様な形態のプログラムがある。派遣留学生への英語教育と多文化教育だが、英語はもちろんのこと派遣先の国の言語の教育も強化する必要がある。そのためにも今後は国際高等教育院とも連携していきたい。インターンシップでは、世界銀行やNASA、UNESCO等の様々な機関に参加しているし、他にも、派遣先の大学の研究室に入るというインターンシップもある。また、日本文化再発見として、本学の留学生と日本人学生が多言語を使って共学・討議する場を設けている。これにより、日本人学生は留学する前に練習ができることになる。また、

MOOCsの講義に参加するという形もある。現在、MITやハーバード大学等で、20万人以上が受講するような講義が世界に発信されている。本学からの発信・受信ももっとあっていい。いろいろな勉強の仕方が用意されているので、それらに乗っていく必要がある。

以上のような状況の中で、2013年7月に本学の国際戦略が「2 by 2020」としてまとめられた。教育に関係するところでは、学生の留学生数を2倍にすること、語学能力の強化として4回生終了までにTOEFL iBT80点以上取得の学生比率を50%以上とすることを目標としている。他にも、国際インターンシップの推進、留学生の質保証・受入数・地域数を増やすこと、全学共通科目・専門科目で英語・多言語の授業を増やすこと、遠隔講義、MOOCsの活用がある。また、日本の文化に興味を持つ留学生と日本人学生がともに学び、理解を深めることを目的として、系統講義「京都で学ぶ日本学・アジア学」を開講することも「2 by 2020」には含まれている。

4. 留学生ラウンジ「きずな」

ここから先は、図書館と図書にかかわることを述べたい。本センターの留学生ラウンジ「きずな」では、留学生と日本人学生の交流や、留学生の図書利用・学習の場・生活のサポート等を行っている。留学生の利用は多いが、日本人学生と教員の利用はほとんどないのが現状だ。

「きずな」の図書の構成は、留学生のための日本語学習テキスト、英語講義のための参考文献、日本文化の紹介書、海外留学案内書、日本映画や日本紹介DVD等である。

図書の利用状況だが、日本語学習用の図書の利用が圧倒的に多い。他には日本語で書かれた本(特に就職のための面接本)等も利用されている。日本人学生の図書の利用は大変少ない。それは、ここに図書があることを知らない

人が多いからと思われる。附属図書館の図書と「きずな」の図書をあわせて検索できるシステムがあれば、日本人学生ももっと「きずな」に来て利用するのではない。

5. 留学生の本学図書館利用状況

留学生の本学図書館の利用状況について報告する。このシンポジウムに先立ち、小規模ではあるが聞き取り調査を行った。調査対象は、本センターの日本語授業を受講している17名である。身分は短期交換留学生(これは6か月ないし1年の中・長期留学生にあたる)の学部学生が8名、研究生が8名、ポストドクターが1名である。分野別では文系が11名、理系が5名である。残りの1名は教員研修であり、京都教育大学の国費留学生だが最初の半年だけ本センターの日本語・日本文化等の講義を受けている。出身地域はアジア6名、欧州6名、アフリカ2名、大洋州1名(オーストラリア)、中東1名(イスラエル)、北米1名(カナダ)となっている。

まず、本学図書館の利用頻度であるが、あまり利用していないようだ。もちろん、小規模調査であるため全体の傾向と言い切れない部分もあるし、短期交換留学生が多いため、すぐに利用する必要がないということもある。レポートを書く時期になったらもう少し増えるのではないか。なお、頻繁に利用する学生も少数だがいる。

利用目的だが、25%が「図書館カード申請のため」と回答している。これは図書館カードを作るために1回だけ行ったがその後は利用していない、ということである。この回答は交換留学生に多い。研究生は次のステップである大学院進学のために、研究や大学院入試の勉強を目的として利用している。他にはPCやプリンター等の設備利用も多い。レポート作成のための文献調査は、交換留学生がレポートを提出する時期になると必要になる。また、1名であるが研究会の場

として利用しているという回答があった。同じ研究室の先輩とグループで定期的に研究会をしているとのことである。

利用状況の傾向としては、理系の学生はE-Journalの利用が多いため、利用頻度が比較的低い。研究室が遠隔地のため物理的に利用しにくいという場合もあるようだ。それに対して文系の学生は利用頻度が比較的高い。また先にも述べたが、短期交換留学生は利用頻度は低いもののレポート作成のために利用している。

附属図書館のサービス・施設の利用状況について質問したところ、留学生対象の附属図書館オリエンテーションへの参加者は12名であった。これは非常に役に立った、という声があった。レファレンス・デスクや留学生対象サポート・デスクを利用しているものはいない。附属図書館で行われた留学生対象ツアーは1名が参加したが、「必ず参加するようにと事務室に言われたので参加したが、非常に役に立った」と言っていた。また、オリエンテーションや説明会に参加したことはないが、機会があれば参加したいという人が6名、サポート・デスクを利用したことはないが、あることは知っているという人が7名いた。

6. 留学生・外国人研究者の図書館へのニーズ

留学生・外国人研究者の図書館へのニーズをまとめると、まず情報発信については、もっと英語による情報が欲しいという声が多かった。また、オリエンテーションや説明会に参加した人はとても役に立ったと言っているが、参加していない人からは、開催されていることも知らなかったのも役に立っていないと言っているが、参加していない人からは、開催されていることも知らなかったのも役に立っていないと言っているが、参加していない人からは、もっと案内や広報を増やしてほしいという意見があった。英語で行われたツアーは上述の通り、とても役に立っているようだ。蔵書に関しては、E-JournalやE-Bookを増やしてもらえるとありがたいという声があった。施設や設備については、電源コンセントを増やしてほしい、という声があった。

多かった。これは多くの学生は特定の文献を探すために利用するのではなく、個人の勉強の場として利用しているためだと思われる。その関連で、附属図書館は静かで快適、勉強しやすいと好評である。ただ、個人の勉強の場としてはとてもよいが、グループで勉強やディスカッションのできるスペースがもっとほしいという声もあった。また、学習室 24 の週末の利用時間が短いという意見もあった。利用資格については、「身分によって利用できなかったり利用条件が違ったりする図書室があるのが不便」「結局、出身大学のオンライン・ジャーナルの方が利用しやすいので、今でも利用している」という声があった。

7. 検討課題・今後への期待

情報提供については、たとえば各図書館・室の所在地は同じ地図の上に表示されているが、さらに詳しく、その建物の中のどこにあるかまで分かればよい。また、オリエンテーション等の開催の情報や、KULINE (京都大学蔵書検索) は意外に知られておらず、KULINE って何？どこから入れるの？という声があるので、KULINE への入り口をもう少し目立つようにしてもらえると嬉しい。

検索方法については、第一歩目を示していただけたらと思う。彼らが自分たちでできることはやればよいと思うが、最初のサポートがあれば違ってくると思う。欲しい本が見つからない時などのフローチャートがあれば、その後は自分たちで積極的に進めていける状況が作れるのではないか。今は、オフィスアワーに教員が一人一人に対して、KULINE はここにあって、こんな検索ができて、と説明している状況である。彼らが自分のできるようになればいい。

蔵書については、英語の Journal や専門書は充実してきたと思う。ただ、英訳本、あるいは中国語・仏語・独語等に翻訳された図書はまだま

だ少ない。日本語学習の本は「きずな」に充実しているが、存在を知られていない。「きずな」で図書を利用できるという情報を提供していかなくてはならない。E-Book、E-Journal の提供は今の時代には必要である。今の学生は、図書館に行く前にまずサーチエンジン等で検索しているようだ。Journal は充実しているが、できれば本がそのままオンラインで利用できるとありがたいという学生もいた。

ただ、このように便利になればなるほど、適切な利用の問題が出てくる。すぐに利用できるのはありがたいが、学生には著作権や剽窃の問題についてじっくりと考える機会を初年次や、レポートを書く際等に与える必要がある。また、オンラインで何でも見られるのは非常に簡単だが、簡単すぎて、きちんと中身を吟味しているだろうか。適切な利用については今後の教育がカギとなる。図書等の利用が簡便になるのは大いに歓迎だが、同時に、正しい利用法があること、図書(館)の利用はあくまで特権であって、権利ではないことを理解する必要がある。それは、学生・教員・研究者全員の責任であることを強く意識して利用しなければならない。

講演2

「東北大における留学生協働による学習支援」

東北大学附属図書館
情報サービス課専門員
横山 美佳 氏

1.はじめに

東北大学附属図書館は本館と4つの分館、14の図書室で構成されている。本館は人文・社会科学系の学部が設置されているキャンパスにあり、主に学部生向けの教養系資料、人文・社会科学系の専門書を所蔵している。入館者数は1日平均2,000名、平日平均2,500名となっている。

東北大学附属図書館本館では平成24年の11月末から留学生コンシェルジュサービスを始めた。これまでの実質的な実施期間は8か月程度で、まだ始まったばかりのサービスである。本講演ではサービス導入の背景、活動状況、成果と課題、今後の展望について述べる。

2.背景

2-1. 東北大学について

東北大学は「ワールドクラスへの飛躍」と「復興・新生の先導」を目的として教育の国際化を図っている。また、文部科学省による「グローバル30」と「グローバル人材育成事業(全学推進型)」の両方の事業に採択された唯一の国立大学でもある。「グローバル30」では英語コースの増設や短期留学生受け入れプログラムの拡充などといった留学生の受入環境を整備している。「グローバル人材育成推進事業」では日本人学生の語学力・コミュニケーション力、行動力を養成し、グローバルリーダーを育成するために「グローバルリーダー育成プログラム」を展開している。外国人学生と日本人学生がともに学ぶ共修の環境を整備するとともに、グローバルキャンパスの実現を

図る取組みがなされている。現在、以上の事業を一元化する体制を目指している。

留学生の受入数は、平成24年度は78カ国・地域で1,431名である。国別にみると、中国53%、韓国13%、インドネシア4%となっている。

2-2. 東北大学附属図書館について

図書館ではグループ学習するためのラーニング・コモンズの設置を計画していた。目指すのは学生が主体的に学修するための設備と人的支援の両方を兼ね備えた施設である。グループ学習するための机やイス、ホワイトボードなどのほかに、資料を広げて長時間利用できるパソコンや机などの設備面の設計についてはほぼ完了していたが、人的支援に関しては課題となっていた。

また、留学生サービスとしては多言語(英語・中国語・韓国語)の利用案内作成、情報探索法の英語版テキストの作成、留学生向けの見学対応を行ってきた。他に、留学生向け図書として3,000冊程度専用コーナーを設けていた。しかし、周知が不十分であったためか年間貸出は1,400冊しかなく、満足に提供できたとは言い難い状況であった。他の取り組みについても、利用案内と英語版テキストは留学生向けのオリエンテーションなどで配布するのみとなっていた。館内見学は教員の要請により実施していたが、その後の利用に結びついているかは不明であった。このように、サービスやツールをただ提供するだけではなく、それらと留学生を結ぶ人的支援が必要であり、また、日本人学生との異文化交流の中で、留学生とこれから留学を目指す日本人学生双方の支援を行うことが重要だと考えていた。

3. 留学生コンシェルジュ

以上のような状況の中で企画したのが、留学生による留学生のサポート事業「留学生コンシェ

ルジュサービス」である。このサービスは①留学生の学習支援および不安の解消、②日本人学生との異文化交流、③就業体験による留学生の育成の3つを目的としている。平成24年度に大学の留学生施策充実経費へ申請の結果、採択され、サービスの開始は11月からとなった。平成25年度は前期分と後期分を申請し、採択された。

採択にあたっては教員の協力を得ることができた。留学生の参加する国際共修ゼミなどを担当する教員から推薦していただき、図書館職員による面接を経て留学生など5名を時間雇用職員として採用した。あらかじめ教員からの推薦を受けていたので、面接の際には、窓口で重要となるコミュニケーション力を最終チェックした。教員に推薦を依頼する際に図書館側から希望した条件は3つあった。1つ目は、身分を大学院生とした。これは窓口では様々な質問が寄せられるので経験豊かな大学院生が適当だと判断したためである。2つ目は専攻分野と出身国が多様ということである。3つ目は母国語の他に日本語が堪能で、また英語での日常会話が可能だということである。図書館職員ともコミュニケーションをとることが不可欠なので、日本語を必須とした。これらの条件は非常にハードルが高く、人選にあたった先生から苦慮されたと聞いている。

平成24年度の実施体制については、対応時間は平日の12:00-17:00とした。対応言語は日本語・英語・中国語のほか、インドネシア語・ロシア語・ウクライナ語の計6か国語である。専門分野は人文系が多くなっている。平成25年度は予算の関係から、対応時間が一時間短くなった。しかし、言語は韓国語が加わり、計7か国語となった。留学生コンシェルジュは5人なので、一週間に一回担当を決めて窓口に入ってもらっている。採用時の研修はそれぞれの勤務時間に実施した。指導にあたったのはレファレンス担当職員で

ある。

研修にあたって重点を置いた事は主に2点である。1つ目は職員として採用しているので、勤務時間中は職員としての自覚を持ってもらうことである。2つ目は情報検索方法に関する研修である。窓口対応では自分の分野以外にも様々な質問が寄せられるので、一通りのデータベースを覚えてもらった。研修にかけた時間は全4日間程度である。一人につき週に1度の担当なので一か月程度かけて研修を行った。一週目は図書館の利用方法、資料の配置、情報探索法などの説明で、2週目以降は実際に窓口に入り、図書館職員と共に利用者の窓口対応実習を行った。

4. 活動状況

留学生向けには多言語案内作成、留学生用図書の見学への参画・レビュー作成、留学生向け館内見学対応を行った。全学生向けとしては窓口での相談受付、講習会の実施、異文化交流イベントの実施を行った。メイン業務は窓口での対応となるが、利用者の来ない時間帯には翻訳作業や選書、また、見学や講習会のイベントが予定されているときにはその準備を行ってもらっている。

それぞれの活動内容の詳細を述べると、多言語の案内作成では、利用案内やポスター、各種掲示類など、今までなかなかできなかった翻訳作業を進めてもらっている。最近ではほかのキャンパスにある分館からも要請があり、翻訳する機会も増えている。留学生用図書の選書については従来職員が行っていたが、こちらについても参画してもらっている。また、3,000冊ほどある留学生用図書の中から何冊かおすすめ本を選んでレビューを日本語と英語で書いてもらっている。中には折り紙の本を選んだ学生がおり、和紙で折り紙を折り、展示をしてくれた。こういったレビューは図書へのナビゲーションにもなり、掲示と

展示をコンシェルジュの窓口の近くで行ったので、留学生コンシェルジュの存在のアピールに役立てられたのではないかと考えている。他にも留学生用図書コーナーのチラシも作成し、教員の協力も得て、留学生の授業の中で配布してもらった。

留学生向け館内見学については、以前は見学者数は約 30 名程度だったが、平成 25 年 11 月現在で約 170 名程度と増えた。この見学を申し込んでくださった教員は留学生コンシェルジュの存在をご存知だったようである。一部の見学者は、見学が終わって次の日から早速、留学生コンシェルジュの窓口を訪れてくれた。

窓口の場所はレファレンスデスクの一角である。図書館に入って最初に現れる席にあたる。目立つ場所にいてほしいという思いから一番前に配置した。窓口対応の対象としているのは留学生だけでなく、すべての利用者としている。窓口での相談受付件数は平成 24～25 年度前期(約 6 ヶ月)約 400 件である。一日平均 3～4 件であるが、日によって波があり、多い日には 10 件程度の日もある。記録を取って件数を出しているが、記録から漏れているものもあるので、実際にはもう少し多い。利用者の内訳は、留学生が 34%、それ以外の日本人学生等が 59%と、留学生にも日本人学生にも幅広く利用されていることが分かる。留学生対応で使用した言語は日本語以外では英語が 20%、それ以外が 47%である。留学生の母国語で対応するケースが多いということから多言語化の効果が表れているのではないかと感じている。

相談内容は利用指導が圧倒的に多い。図書館の設備の利用方法、貸出返却の仕方、パソコンのログインの仕方、無線 LAN の設定の仕方など、図書館を利用するうえで基本的な質問が非常に多いということが分かる。その他としては、研究計画書の書き方、レポート作成法の相談、日本語

に慣れないことの悩み相談などがある。留学生がライティングのサポートや先輩留学生のアドバイスを求めているということが伺える。参考までに職員が行っているレファレンスの対応状況を見ると、所蔵調査・事項調査が 90%で、利用指導はわずか 1%となっている。ここから、留学生コンシェルジュが職員のサービスを補うことで、図書館全体として人的支援が強化できているということがいえる。

相談内容は日本語で詳細な記録を取っている。どういった相談を受けたか、どのように回答したか、データベースに関する相談の場合はどのデータベースに関する質問だったのかなどである。留学生コンシェルジュ同士の情報共有にも活用でき、また、指導に当たる職員の情報共有にも活用している。

講習会は今年から試みている。従来職員が行っている学部 1 年生向けのレポート作成法の講習会である。レポート作成法の講義を受けた学生を対象に個別のテーマに絞った講習会を行っている。第一部が「レポート作成法入門」となっており、第二部は、体裁編・文章技術編・内容充実編といった個別の内容となっている。留学生コンシェルジュには第二部を担当してもらった。参加者は日本人学生のみで 53 名であった。受講者の感想を見ても好評であったということが分かる。この経験を今後窓口でのサポートにも生かすことができると思う。また、将来的には英文のレポート作成法にも展開していけたらと思っている。オープンキャンパスでは異文化交流イベント実施の試みを行った。こちらも今年初めての試みである。留学生コンシェルジュに専門分野や母国に関することをテーマにお話をしてもらった。参加者数は 97 名で、「参加したオープンキャンパスイベントの中で一番楽しかった」という声もあり、非常にうれしく思った。今後、この経験を元に異文化交流につなげていけたらと思っている。

5. 成果と課題

以上が留学コンシェルジュのこれまでの活動状況である。留学生に対して特別な事を行っている訳ではないかもしれないが、重要なのは留学生が日本人と同じように図書館を利用できるようになることである。それぞれの取り組みもまだまだ試行錯誤しながらスタートしている。

これまでの活動について、利用者からは「気軽に質問できて嬉しい」「窓口を訪れてためになった」などといった声をいただいている。また、要望としては夜間サービスの実施と館内案内の多言語化などが上がっている。

留学生コンシェルジュからは、良かった点として様々な声が上がった。留学生の学習支援および不安解消、日本人学生との異文化交流、就業体験による留学生の育成、それぞれの目的について一定の成果が上がったと考えている。留学生からの提案としては、留学生同士で本を紹介し合うイベント企画や留学生と日本人学生が交流する場の提供という意見があった。

図書館の成果としては、この取り組みを通じて、学内関係部署・教員・グローバル推進事業との新たな連携協力が生まれた点、ラーニング・コモンズでの留学生協働により、図書館全体の人的支援が強化され、サービスが向上した点が挙げられる。また、図書館における留学生サービスを従来のものから次の段階に進めることができたと思っている。次の段階とは、留学生と留学を目指す日本人学生双方の支援と異文化交流、即ち「グローバルラーニング」への展開になる。グローバルラーニングとは、東北大学附属図書館の米澤総務課長がこれからのラーニング・コモンズの可能性としてこの言葉を挙げており、「学生のグローバル化に資する学習」と定義している。具体的には語学学修、異文化学習、留学学習、多文化交流があると述べられている。

課題としては、まずは留学生コンシェルジュサービスの継続と定着であるだろう。この取り組みを一時的なものに終わらせないために予算の確保・留学生関連部署との連携強化はかることが不可欠である。

また、まだ始めたばかりということもあり、これまでは職員が企画を行ってきたが、今後は異文化交流イベントへ展開ということも考えられるので、留学生コンシェルジュ自身による企画の推進を行ってもらいたいと思っている。そのためには企画力アップの仕掛けが必要であり、留学生コンシェルジュ同士の連携が図れるような事を検討していく必要がある。

この8月に東北大学の指針となる「里見ビジョン」が公開され、そこで図書館は国際交流と知的交流を促す場として位置付けられた。また9月には「本学の学生支援体制についての提言」というものがまとめられた。ここでは「教育改革推進のための6つの基本方針」があげられ、5つ目に「ラーニング・コモンズ」キャンパスの構築」がうたわれた。里見ビジョンや提言に関しては、これまで図書館が行ってきたラーニング・コモンズの設置や留学生コンシェルジュの取り組みが評価されたと受け止めている。このような学内の状況を踏まえて、更に留学生サービスを強化していきたい。

附属図書館では平成25年度から26年度にかけてグローバルラーニングエリアを設置する。留学生と日本人学生、加えて、日本語や日本文化を学びたい留学生といった学生を支援する。さらには学生たちが共に学びあう、国際共修のとりくみを支援していく。体制としては、留学生コンシェルジュと人材育成事業で育てた人材(＝グローバルリーダー)による協働の企画となる。そして、図書館と留学生関連部署が協力してこれをバックアップしていくという形が考えられる。また、資料の収集や人的支援等様々な連携が考えら

れる。これからの具体的な連携の可能性について既に話し合いを始めている。また、図書館は開館時間が長いということと、ある程度場所が広いということもあり、場所の提供という面でも期待されている。これから新たに作るグローバルラ

ニングエリアの設備について、教員とも相談をさせていただく予定である。

こういった形で図書館が今後、東北大学のグローバルラーニングの舞台の一つとなっていけるように、更に取り組みを進めていきたい。

講演2

「東北大における留学生協働による学習支援」

東北大学附属図書館

留学生コンシェルジュ

兪 幃蘭(ユ キョンラン)氏

1. 私の留学経験について

まず私が東北大学大学院教育学研究科に留学することとなったきっかけを説明したい。私ははじめ韓国の大学で日本語、日本文学、日本語教育を勉強していた。次第に日本語の教師になりたいと思うようになり、生きた日本語を教えるためには日本で留学経験があった方がよいと考え、宮城学院女子大学の交換留学生として1年間留学した。卒業後、3年間ほど日本の航空会社で就職し、日本に移住してきた人と出会う機会をたくさん得た。社会人としてキャリアを積む中で、本当にやりたいことは日本語教師ではなく、外国人向けのカウンセラーであることに気づいた。しかし、これまで心理学を専門的に学んだことはなかったため、働きながら放送大学などで勉強を始め、東北大学に入学した。現在は在日外国人と在日外国人留学生のメンタルヘルスについて研究している。

東北大学に入学した当初から不安があった。1つ目は研究計画書の書き方についての不安である。研究室で最初に先生から言われた指示は「やりたいことを書いてきてください」というものだった。当時、心理学に門外漢だった私は、情

報の探し方や研究計画書の書き方に対する経験がなかった。母国でも大学院にまで進んだが、研究計画書は国や分野によって書き方も異なるため、留学してすぐはどのように取り組めばいいのかわからなかった。知り合いや友達に聞きながら、少しずつ分かるようになった。

2つ目は金銭的な不安である。会社で働きながらある程度貯金はしたものの、どれくらいの手生活費・光熱費がかかり、どれくらいアルバイトをすれば、バランス良く支出・収入の計画を立てて目標の長期留学ができるのか想定できなかった。「他の留学生は皆どう生活しているのだろうか」と、周りの留学生の友人などに聞いた。幸いなことに韓国からの留学生は比較的多く、母国のコミュニティがあったため、そこで聞くことができ大変助かった。

2. 留学状況について

日本での留学生受入人口は増加傾向にあり、主にアジア諸国から日本への留学生が急増し続けている。2006年の数値を国籍別にみると、中国が74,292人(63.0%)、韓国が15,974人(13.5%)であり、2か国で全体の80%近くを占める。2006年の外国人留学生の総数は約12万人で、日本政府から奨学金が支給されているのは、約10%であり、ほとんどが私費留学生であることがわかる。

先進諸外国の外国人留学生数を見ると、アメリカが約56万人(2005年)、イギリスが約36

万人(2005年)、ドイツが約25万人(2005年)、フランスが約27万人(2006年)となっている。日本のそれを大幅に上回っていることを受け、文部科学省は留学生数のさらなる拡大と支援のために「留学生30万人計画」を打ち出し、2008年にその骨子を策定した。同骨子によれば、「日本留学への関心を引き起こす動機づけや情報提供から、入試・入学・入国の入りの改善、大学等の教育機関や社会における受入れ体制の整備、卒業・修了後の就職支援等に至る幅広い施策」を行うことで、2020年までに留学生受け入れ数を30万人にまで増やすことを目標としている。

東北大学の留学生受入数について述べると、震災によって少し減少したものの、概ね増加傾向にある。他の大学をみると、東京大学では特に大学院において増加傾向にあり、また京都大学では2020年までに留学生を増加させるという方針である。

以上のとおり大学のグローバル化が進んでおり、その中で留学生コンシェルジュの必要性が生まれてきたのだと思う。

3. 留学生コンシェルジュについて

東北大学附属図書館での留学生コンシェルジュの仕事を紹介したい。

留学生コンシェルジュの仕事は大きく分けて3つあると考えられる。研究の援助、生活の相談、国際交流の窓口の3つである。

1つ目は研究の援助である。CiNii や東北大学附属図書館のOPAC等を使って書籍や電子ジャーナルの検索を教える。私も留学生コンシェルジュの仕事をするまでは詳しい方法を知らなかったが、仕事をするようになり、留学生に日本文献の調べ方を説明することがよくある。慣れている人には必要はないが、まだ日本語がよくわからず、検索をしたことがないという利用者にはハードルが高いようである。調べ方を知らず、

Google Scholar で調べてしまったり、知り合いに聞くということが多いようである。

2つ目は生活の相談である。日本に来たばかりの留学生だと日本語の覚え方について、また日本語をある程度習得したとしても文化の違いにより仲間との関係、指導教員との関係など、日本人との接し方について悩みを持つこともある。他にも、どんなアルバイトが良いかといった経済的なものや、留學生活のなかで感じるストレスについて相談される場合もある。研究室の仲間や指導教員とは違って、留学生コンシェルジュには親しみがあるという声や、国籍が異なるものの、留学生コンシェルジュと話し合うと安心できるという声もあった。これは留学生同士共感できるようなことがあったのではないかと思う。そういった意味で留学生コンシェルジュは「留学生の先輩」として、新種のソーシャル・サポートの機能を果たしているといえるのではないかと考える。

ソーシャル・サポートとは、他者が危機に直面した人の①心理的資源の動員を助けることで、個人の感情的な負担を抑制する、②課題を共有する、③危機に対処するための物質的・手段的資源および認知的指針を提供する、という3つの主要な機能を果たすことによって個人の心身の健康状態を促進することを指す。また、愛情、肯定、援助という三つの要素を少なくとも1つ以上含む個人間の相互交渉ともいわれている。

先行研究によると、在日中国系留学生の適応の基盤は来日後3～9ヶ月の時期に形成されるようだ。その段階で留学生が多くソーシャル・サポートを受け取ることができれば彼らの適応は改良されるが、この時期にソーシャル・サポートが得られなければ、後でソーシャル・サポートが得られても適応の促進に直接役立たないというのである。日本に来てすぐに留学生コンシェルジュなどのソーシャル・サポートが受けられる体制が大切なのではないかと考える。

3 つ目は国際交流の窓口である。母国である韓国を日本人に紹介したり、また逆に日本を留学生に紹介したりする。オープンキャンパスの際に、高校生を相手に韓国の文化や韓国の高校生の受験生活について紹介を行うこともあった。

4. 終わりに

留学生コンシェルジュとして働く中で、自分が留学しはじめた時にいただいた悩みと同じ悩みを抱えている留学生が多くいると感じた。今は支援を受けるだけの立場ではなく、自分の日本での生活と経験を生かし、人に役に立つことができるということにやりがいを感じている。留学生コンシェルジュ同士の情報交換があり、暮らしや研究面で役立つこともあった。これまでの自分の仕事の評価として、「親切度」はまだ満足できる状態にないと考えている。自分がいくら親切に対応しようとしてもスキル面や知識が追い付かないこともあり、気持ちだけでは難しい面があったからである。これからも勉強を続け、留学生コンシェルジュとして頑張っていきたいと思う。

留学生コンシェルジュが単に辞書通りの「管理人」ではなく、留学生が留学生をサポートするという、新概念のソーシャル・サポートになってほしいというのが希望である。また、留学生コンシェルジュの人数を増やすよりも、留学生コンシェルジュの国籍の数を増やすと良いのではないかと思う。加えて、OPAC のような検索に使うホームページを多国語化すると良いと思う。

当講演会につきましては

京都大学学術情報リポジトリ KURENAI にてプレゼンテーション資料を、
京都大学オープン・コース・ウェア(OCW)にてビデオを、公開しております。
そちらもあわせてご参照ください。

プレゼンテーション資料【京都大学学術情報リポジトリ KURENAI】

「大学のグローバル化における図書館の役割 -留学生サービスから考える- <平成 25 年度 京都大学図書館機構講演会>」

<http://hdl.handle.net/2433/180546>

ビデオ【京都大学 OCW】

「平成 25 年度京都大学図書館機構講演会 京都大学図書館機構 「大学のグローバル化における図書館の役割 -留学生サービスから考える」」

<http://ocw.kyoto-u.ac.jp/ja/library-network/07>